

## 令和3年白老町議会人口減少に対応する政策研究会会議録

令和3年 7月28日(水曜日)

開 会 午前10時00分

閉 会 午後 0時00分

---

### ○会議に付した事件

政策研究懇談会 (白老町地域おこし協力隊)

隊 員	鄭 延 雪 君	隊 員	藤 田 姫 夏 君
隊 員	野 田 和 規 君	隊 員	安 田 裕 太 郎 君
隊 員	山 崎 耕 佑 君		

---

### ○出席委員(8名)

座 長	大 淵 紀 夫 君	副 座 長	佐 藤 雄 大 君
委 員	西 田 祐 子 君	委 員	氏 家 裕 治 君
委 員	久 保 一 美 君	委 員	長 谷 川 か お り 君
委 員	貳 又 聖 規 君	委 員	森 哲 也 君

---

### ○欠席委員(なし)

---

### ○職務のため出席した事務局職員

事 務 局 長	本 間 力 君
主 査	八 木 橋 直 紀 君
主 任	神 綾 香 君

## 人口減少に対応する政策研究会（第22回）

### 【調査事項】

事務調査：人口減少に対応する政策研究「若者定住」について

政策研究懇談会

次 第

1. 開会（司会：佐藤雄大 副座長） 10:00～
2. 挨拶（大淵紀夫 座長）・議員紹介 10:00～
3. 懇談（進行：大淵紀夫 座長） 10:13～  
参加者（白老町地域おこし協力隊員）

(1)私の仕事内容 10:13～10:17

鄭 延雪 氏・藤田 姫夏 氏・野田 和規 氏・安田 裕太郎 氏・山崎 耕佑 氏

○鄭隊員 白老観光協会へ所属。観光案内やSNSを活用した海外等への情報発信をしている。

○藤田隊員 ポロトの森で森林ガイドを行っている。水上アクティビティの講師や自身で狩猟した鹿の商品開発を行う予定。

鹿が身近にいる環境で育ち、学校で鹿の生態や地域への影響を聞いて、自身の手で鹿について周りにもっと広めたいという思いが生まれ、鹿の狩猟免許を取得した。

○野田隊員 ポロトの森で森林ガイドを行っている。安田隊員と共同で植物を軸とした民泊経営を行い、主に情報発信や広報活動を行っている。

○安田隊員 野草をテーマとした民泊を経営しており、そのほかにも野草を使用した入浴剤の商品化に取り組んでいる。

○山崎隊員 文化芸術部門としてしろおい創造空間「蔵」で活動している。施設管理や教育委員会でのイベント時にはスタッフとして活動。

(2)なぜ白老町を選んだか

10:17～11:33

①白老町の状況（よいところ、適性、活用等）②将来の展望（こうしたい、可能性等）

○藤田隊員 苫小牧市で地域おこし協力隊員として活動していた高校時代の先輩から、白老町で森林ガイドとして地域おこし協力隊員を募集している話を聞いた。

当時は白老町のことを知らなかったが、実際に訪れてみるとポロトの森がとてもきれいだったので「自分は森林ガイドとしてここで働きたい」と感じ、応募を決心した。

○安田隊員 友人が白老町の地域おこし協力隊として活動しており、白老町へ招待され1か月間滞在した。出身は九州で、白老町には初めて訪れたが、自動車がなくても生活ができるまちであると感じ、まちづくりに類する活動をしながら暮らすには非常におもしろいと思った。

当時は東京都で勤務していたが、コロナウイルス感染症の影響で転居を考え、そのとき白老町へ移住しようと考えた。

○長谷川委員 自動車がなくても不自由なく生活ができたという話であったが、白老町で暮らす人にとっては「車を手放すと交通手段がない」という思いである。自動車がなくても生活ができるまちであると感じた部分について詳しく話を聞きたい。

○安田隊員 住む場所をきちんと選べば、自動車がなくても生活ができない状況ではないと感じた。白老町まで歩いて行ける距離に住んでいれば、海や山、森などの自然から、カフェや博物館、役場などの行政機関もある。平原の広がる地域と比べれば、自動車が不可欠という環境ではないと感じる。

移住してきて、自動車がなくなるタイミングは、遊びに行く際などが考えられるが、友人と一緒にあればそれも不要であると思う。実際に、地域おこし協力隊として白老町に移住してからは自動車が必

要だと感じたことはない。

○野田隊員 大学では森林学を専攻しており、将来は自然の神秘や循環を伝える仕事に就きたいと考えていた。

地域おこし協力隊の活動場所として白老町を紹介している人が知り合いにおり、ポロトの森の森林ガイドの活動を紹介してもらった。そこで、この活動は自身が考えている活動と合致していると感じ移住を決意した。

白老町には当時協力隊として活動している友人がいたので、初めて訪れる地域でも安心して移住することができた。

○山崎隊員 札幌市の劇場に勤務していたときに、文化財団から声をかけられて、白老町で「蔵」の施設管理を募集している話を聞いた。

一度「蔵」へ訪れた際に元酒蔵のホールを見て感動し、ここで働きたいと強く感じた。

現在は自転車を利用して町内を移動しており、非常に満喫している。札幌市で生活していたときと比べて、生活の流れや人との関わりがとても穏やかで魅力に感じており、それは白老町のよい環境があるから生まれるものであると感じた。

○西田委員 地域おこし協力隊員として白老町で実際に活動して、充実しているのか。白老町には若者が集まる場所がないと感じる。どのような部分に魅力を感じ、楽しんでいるのか。

○山崎隊員 町内を散策することを楽しんでいる。今は町内の景色を見るだけでも十分に楽しく感じており、飽きがこない。

白老町への移住を決めたときに、町内に住む知り合いに「白老町には若者が集まる場所はなくてよい。今のこのまちを好きでいてくれる若者を増やすようなことが何かできないか」という話を聞いて納得した。

白老町でしかできないことがあるので、そこは変えなくてよいと思う。

○野田隊員 火山、海、山、森と自然が豊かなのでフィールドワークをしている。自身の好きなことが仕事に直結しているので、プライベートと仕事の境目がほとんどない状態である。学び、それを訪れた人に伝えることが楽しい。

反対に、自然への興味が薄い人や自分自身で楽しみを見つけることが苦手な人にとっては、時間の使い方は難しいのではないかと感じた。

○安田隊員 白老町へ移住してきた身としては、日常生活が楽しい。日常生活の中で見つけた楽しみを民泊業や商品開発に落とし込んで、町外から訪れる方に提供することを考えることも楽しい。

湧き水や鹿肉など、白老町に住んでいないと口にできないものもあるので、非常におもしろい体験ができていると思う。

○鄭隊員 道外から訪れた観光客を案内したときに、当初は1泊の予定であったが、紹介をするうちに時間が足りなくなり予定よりも長く滞在し、ぜひまた訪れたいという声があった。

住み始めは車がなかったが、不自由なく生活することができた。町内を歩いて散策していたときに、町民から声をかけてもらい、とてもうれしかった。自身からもあいさつをすることも増え、町民との交流が増えた。白老町の人はとてもやさしいと強く感じた。

○氏家委員 町民はここにあるものや環境が当たり前になっている。そのため、人へ伝える術を知らないのだと感じる。その中で、地域おこし協力隊が訪れて魅力を発信してくれるというのはとても大事なことだと思う。

高齢化によって、町内にある宿泊施設の後継者がおらず、自分の代で終わらせるという話をよく耳にする。地域おこし協力隊の活動期間の中で、こういった課題にも向き合ってもらいたいと考えている。

○安田隊員 活動を始めてまだ日が浅いからか、現在はそういった声を聞く機会はない。

環境に恵まれている土地だと感じるので、自分の代で終わらせてしまうのは非常にもったいないと感じるので、できることがあれば手伝いたい。

○氏家委員 現隊員だけでは難しい部分でも、身近な人へ紹介する等ができれば、新たなつながりが生まれるのではないかと考えている。

○鄭隊員 観光案内で外国人へ温泉を紹介する際には、外観を重視して案内することが多い。温泉としてよい場所は多く、自身が利用する場合は問題ないが、建物が古い施設だとためらってしまう。

温泉施設へ電話取材する際に、経営側から「うちはもう古いので案内してもらわなくてよい」と言われることがある。白老町の魅力として、多くの人に伝えたいと考えている。

温泉の動画作成の際に、町民が実際に町内の温泉を利用して協力をしてくれたことがあった。町民との関わりは大切だと思うが、協力隊になったときの町民との交流の場が少ないと感じた。

白老町に移住したとき、役場で住居や配偶者の仕事などを探す際に協力してくれた。やはり役場から

白老町の様子を聞くことは大事だと感じた。

○佐藤副座長 白老町のよいところや魅力について多くの話を聞くことができたが、協力隊の採用方法や枠についての考えを伺いたい。

○安田隊員 採用枠については増やしたほうがよいと思う。若者世代としては、住んでいる場所を離れ今まで勤務していた職場を退職し、白老町に定住するということはなかなか難しいと考えている。仕事が決まっている場合ならよいが、町内にどのような資源があり、どのように活用していくかを見極めるには協力隊の制度を利用するのが一番有効であると思う。

ただ、採用枠を増やしすぎるとということも難しい状況が生まれるのではないかと考えている。隊員同士で類似した活動が多く発生してしまう可能性もある。

○野田隊員 採用枠は増やしたほうがよいと思う。同年代の中には、現在の仕事を辞めて地方で自分の好きなことをして生計を立てたいと考えている人が多くいる。しかし、住居や金銭的な問題があるので、協力隊制度の活用ができるといいと思う。

協力隊に応募してくる人は、それぞれの得意分野があり、自分の能力を活かした仕事をしたいと考えている。そういった人の視点や活動の中での新たな発見があると思うので枠を増やすことには賛成である。

○久保委員 白老町の観光地にはポロト湖だけでなく、クッタラ湖というところもあるが眠った状態である。水質も日本一になっていて魅力ある場所なのにもったいない。地域おこし協力隊の中で場おこしができればいいと考えている。

○安田隊員 協力隊の人数というのは町の状況に応じて設定するものだと思っている。

目的意識を持った採用枠の拡大はいいが、多くの人数を確保するだけの目的で枠を増やすことはよくないのではないかと考えている。

○西田委員 自分の能力を活かしたいという話があったが、現在白老町で募集している活動内容と協力隊希望者の求めている活動が合致しているのか疑問である。町として、どのような活動として協力隊を募集したらよいのか。

若者が今の仕事を辞めて地方で活動したいと考えているのだという実感があまりない。

○野田隊員 自身の周りにいる人の傾向としては、会社のために頑張る仕事というよりは自分のために頑張る仕事を求めている。長時間の勤務で多くの年収を得るよりも、好きなことをして最低限の収入があればいいと考えている人が多いと感じている。

漠然とした目的はあるがまだ具体的には決まっていない人も多くいる世代であると思う。そのため、今の仕事を辞められないということもあるのではないかと。

協力隊制度を利用することができたら、3年間で自分の興味のある分野を深めながらいろいろな人に話を聞くことができるのではないかと。新たな一歩を踏み出す後押しとして、協力隊制度は有効であると思う。

○西田委員 3年間の活動期間で自立するということは難しいのではないかと感じている。その中で、現隊員の考えを聞きたい。

○大淵座長 今年が3年目の隊員もいるが、どのように考えているか聞きたい。

○鄭隊員 協力隊に入る前から、自身の目的や目標については考えていた。起業か観光協会に勤めるかの選択肢を持って活動していた。現在のコロナウイルス感染症の影響で、起業については難しいと考えている。

○藤田隊員 協力隊として活動し始めのときは明確な目的を持っていなかった。1年目から2年目の途中までは苫小牧市の自然学校での研修が組み込まれていた。自身にとって大切な時間ではあったが、ほかの活動に割くことができなかつたのはもったいなく感じる。活動資金についても、自由に使えない部分があった。

現在は、研修や教材など自由に使用できるようになったので良かった。

○貳又委員 白老町は環境が優れており、白老町で暮らす価値について国内だけでなく、海外へも発信できると考えている。

特にポロトの森は、観光の拠点となっている。しかしコロナウイルス感染症の後に観光客が訪れた際、今までどおり町外業者が進出してくることを危惧している。

観光で人を呼ぶことも大事だが、一番は訪れる人に感動を与えることや環境に配慮した取組が大事である。芸術文化の高いまちにする要因としてポロトの森が挙げられると考えている。

ポロトの森が森林ガイドの方の活躍の場としてつくられるには、まちの働きかけが必要である。

○安田隊員 ポロトの森を活用して人を呼び込むためには、どういった団体が主導権を握るのか、どのように町または北海道へ話を持っていくべきなのか、民間団体だと分からない部分があると思う。それ

を実現できるのは組織力を持っている町外などの大企業である。観光地として発展するうえで町外業者の進出は避けられないが、白老町の魅力を損なわないようにはたらしは必要である。その予防のためには町から環境を大事にするための手順を整備すべきだと思う。

○貳又委員 よりよい観光地をつくるためには意見交換が必要である。白老町という土地を守ることが大切であり、環境や文化を未来へつなげていくためにも地元の人々が動くべきである。

(3) 白老町の若者定住策について（促進策等） 11:33～12:00

○大淵座長 政策研究会では、多くの若者が白老町で暮らし、仕事をして子供を産み育てることで、その子供たちも白老で育つことや、若者が地元へ戻ってくることを目指している。

人口減少は止められないが、活気のあるまちをつくるためにはどうしたらよいかを考えることが研究会としての使命である。そのことに対しての現協力隊員の思いを伺いたい。

○安田隊員 環境保全に力を入れて、その主導権を握るのは行政であると考えている。行政がイニシアチブを持って環境を守るという土台があったうえで、ポロトの森を中心に活動し、日常生活を楽しむという営みが生まれるのではないかと。

○大淵座長 白老町に不足していることや、改善点について思っていることを伺いたい。

○野田隊員 単純に若者が不足していると感じている。そのためには、家賃の安い住宅の提供が必要なのではないかと考える。それをきっかけとして、白老町の魅力や楽しみ方を見つけ定住してくれる若者はいると思う。

例えば若者を対象として、安価な家賃の住宅を期限つきで提供し、地域の事業所を回るというプログラムがあれば、若者は集まると思う。

○氏家委員 白老町へ来ても仕事がないという声を聞いている。リモートワークなど仕事の体制は様々であるので拠点は大都市に置かなくてもよいという考えがあれば、安価な住宅の提供という案は有効であると考えられる。

今までは、企業誘致という形で働く場の提供を考えていた。しかし、若者は働く場ではなくて住居の確保が必要だという感覚なのか。

○野田隊員 白老町で就職先があったとしても、週5日勤務の正社員という条件だと人は集まらないと思う。その条件であれば大都市で働くほうがよいと考える人が多いためである。反対に、働かなくても最低限の生活ができる環境であれば人は集まるのではないかと考えている。

起業や新たな仕事をつくるためには膨大な余暇が必要である。仕事先がないから地方へ来ないという考えではなくて、仕事があるので地方には来ないという発想が、新たな仕事を始めたい人には多いと思う。

○氏家委員 大都市から地方へ移住してきたときに、孤立などの不安要素などがあるが精神的な部分の支援環境は必要なのか。それとも場所の確保や体制の強化に力を入れていけばよいのか。

○野田隊員 個人の感想としてあまり孤独感はない。個人差があると思う。

○安田隊員 交流を求める人は交流をしに行くと思う。

○山崎隊員 ひとりの環境になってしまうと孤独を感じてしまうが、周りの人や隊員たちがいるので充実した生活ができている。周囲の支援がなければ、この環境を嫌に感じてしまっていたかもしれない。

○佐藤副座長 担当課との関係性や要望があれば話を伺いたい。

○安田隊員 担当課に限らず、白老町としての方向性や具体的な目標、目標を設定した根拠などが共有できれば、隊員としてもどうサポートすればよいか行動しやすいと思う。

○山崎隊員 担当課から、紹介してもらえる団体や施設の見学など、隊員だからこそできる経験があるのでとても感謝している。

○森委員 協力隊として活動する地域を選ぶときに、その土地や環境が自分に合っているかを重視すると思うが、募集の枠は固定であるほうが活動する際にいいのか自由な枠があるのか伺いたい。

○野田隊員 自身の希望する仕事と募集枠が合致していたので何をすべきかが明確であった。自由枠であるとならばいいか分からなかったのではないかと。社会人として多くの経験を積んでいる人にとっては自由枠もいいのかもかもしれないが、個人的には縛りがあったほうが、興味のある分野を絞り込み、力を入れることができるのでいいと感じている。

○西田委員 例えば飛生では芸術家の人たちが集まって活動しているが、そのような形で協力隊として活動ができる環境があれば、募集は来るとか伺いたい。

○山崎隊員 芸術文化部門は注目されていると感じているので、枠を増やして宣伝を行えば人は集まると思う。

○鄭隊員 白老町として、今までどのようにして町外へ宣伝活動をしているのか。

○本間局長 しらおい移住・滞在交流促進協議会という団体では役場や商工会、観光協会と東京都や大阪府などへプロモーションを実施している。また、ポータルサイトの運営も行っているが、この部分については今後も強化していく必要があると考えている。

○大淵座長 最後にそれぞれからまちや身の回りで感じる要望や思いについて伺いたい。

○鄭隊員 白老町で育った若者が町外へ転出した際に、にぎやかなまちが好きな人であればそのまま白老町へは戻らないし、落ち着いた静かなまちが好きであれば地元へ戻ってくると思う。自然やのどかな生活が好きな人たちへ宣伝することが大切であると思う。

大学などではボランティア活動を実施しているが、自然に関わる学科を選考している学生たちに宣伝することで意見をもらえるのではないか。

○藤田隊員 若者は奨学金の返済など金銭的に厳しい人も多くいるので、安価な住宅など生活コストを下げる必要があると感じた。地方でのんびり生活したい人が同世代にも増えているので、シェアハウスや安価な家賃の住宅など住む場所が大事になってくると思う。

○野田隊員 他の市町村では、期限つききで無償滞在できるイベントなどがあり、SNSでも話題になっていた。大都市で働くのではなく、自分で仕事を見つけ地方で暮らしたいと考えている人が集まると思う。

○安田隊員 白老町にマッチする人、そうでない人というのは必ずいると思うので、どのような人を白老町に呼び込みたいかを考えておくことが大切であると思う。その人材へ向けた宣伝を行うことが大切である。

宣伝を受けてお試し体験をした若者は、1年から2年程の時間をかけて移住を決意すると思うので、その間の移住に向けたサポートも必要である。

○山崎隊員 やはり家賃の安い住居は必要であると思う。

4. 閉会

～12:00

○大淵座長 政策研究会は継続していくので、地域おこし協力隊とは今後も交流していきたい。